

《西洋史研究室の現在》

時代別演習と専任教員の講義

令和2年度 西洋史学特殊講義 担当：教授 南川 高志

前期 ローマ帝国研究と帝国史叙述の基本問題 I

後期 ローマ帝国研究と帝国史叙述の基本問題 II

今年度は私にとって、京都大学教授として授業する最終年度であったため、特定の研究テーマを扱ったこれまでの特殊講義とは異なり、ローマ帝国史全体にわたる講述を行った。前期はローマの帝国化より始めて皇帝政治の成立まで、後期は帝国の最盛期からスタートして5世紀の帝国解体期まで、それぞれ各所に研究史と問題点の解説を織り込みつつ講述した。Zoomによる講義であり、毎回ワードで作製した文書資料、数度はパワーポイントの資料を画面共有して、できるだけ通常の講義に近づける努力をしたが、史資料の利用に不自由を感じたところがあった。私自身の本来の専門領域は帝政前期の政治史と社会史であるが、今年は共和政後期や帝政後期についても論じた。ほとんどの受講生が前期・後期を通じて受講してくれたので、私の独自性も込めたローマ帝国の歴史像を理解してもらえたのではと感じている。

令和2年度 西洋史学演習I（西洋古代史演習） 担当：教授 南川 高志

本年度の西洋古代史演習は、ギリシアもヘレニズムも含みこんだ「ローマ世界」について、その世界の構築者・担い手としてのローマ人とローマ帝国の有した統合的機能やその変化を、政治、社会、文化、宗教など多面的に観察しながら、「世界」の特質と歴史的意義を理解することを課題とした。最初の数回は、初めて西洋古代史の研究を始める新3回生のためのイントロダクションを兼ねて、日本人研究者が書いた今年度の課題に関連する日本語論文を読み、予備知識を得ることに努めた。次いで、基本テキストとしてハーヴァード大学教授エンマ・デンチの近著 Emma Dench, *Empire and Political Cultures in the Roman World*, Cambridge University Press, 2018 を取り上げた。そして、受講者が交代で行う内容紹介を聞いた上で、その議論を理解するとともに、問題点を全員で討論した。テキストを通じてだけでなく、毎回の討論から受講者は欧米古代史学界の研究水準を知り、同時に問題点も知ることができたと思う。テキストを用いた勉強が終わった後は受講者自身の個別研究報告に移り、全員で討論をおこなった。秋の一時期、対面授業としたが、大半はZoomによる演習授業となり、これまで当たり前であったような史資料の利用や討論が十分にはできなかったことが残念であった。

基本テキストとして用いたE・デンチの書は、ケンブリッジ大学出版の古代史入門シリーズの1冊であるが、学界で話題になった研究書であり、著者独自の問題関心に基づいて、既

成の概念に寄り掛からずに、重要な研究テーマについて新たな次元へと向けた議論を行っている。その叙述は高度であるが、高度であるだけでなく、英語の文章が独特の言い回しであるために、学部生も大学院生も悪戦苦闘したようである。しかし、この書物を検討した経験によって、複雑な歴史的事象を読み解くことの難しさ、概念の有効性を検証することの重要性、スケールの大きな議論の大切さを受講生全員が学んでくれたのではと期待している。

令和2年度 西洋史学演習Ⅱ（西洋中世史演習）担当：教授 佐藤 公美
（甲南大学）

研究に自ら取り組む力を若い学生・院生に学んでもらう方法として、唯一ではないにしても最良のものの一つは、やはり研究の最前線を一緒に学び議論することだろう——このような考えで採り上げたテキストが、年度前半に読んだ B. H. Rosenwein, *Generations of Feeling: A History of Emotions, 600-1700* (Cambridge University Press, 2016) である。感情史は現在おそらく最も注目されている方法論であり、中世史を専門とする本書の著者ローゼンウェインが提唱した「感情の共同体」論は、中世史以外の研究者にも広く言及されている。しかし日本の現状では、感情の共同体論も、中世感情史の可能性も限られた例を除けば中世史研究者自身によって十分に意識されているとはいえない。

ローゼンウェインが「感情の共同体」と名付けたものは、固有の価値や感情の感じ方、感情表現の方法などを持つ集団のことだ。一つの地域・時代には複数の感情の共同体が併存することもあれば、感情語や表現方法が時代や地域を超えて共有されることもある。それゆえ、感情史は既存の時代区分を乗り越える可能性も持つと言える。ローゼンウェインは、これまでの感情史の中・近世（近代）の区分を批判し、演習で採用したテキストでは中世を中心にしつつも古代のキケロから 17 世紀のホブズに至るまでの長い時間を扱っている。

演習メンバーからは、史料の中の感情語彙の分析と社会の実態との関係や、読み取ることのできる感情表現と史料の性質の関係、感情語彙とそれらの相互連関から果たして時代や地域を超えた感情の共同体の連続性を読み取ることができるのか、といった諸問題についての疑問や批判が多々提示され、議論はなかなか活発であった。議論の余地があるからこそそこに自らの歴史学が育つのだと理解してもらえたならば幸いだ。

担当者には、感情史という手法が確固とした学際的研究を要請することが強く印象に残った。感情史の学際性と言えば、一般には脳神経科学や心理学などの理系・実験系の学問領域との協働への注目が目立つ。しかし本書におけるローゼンウェインの議論は、むしろ哲学、思想史、文学史など隣接諸分野における研究の蓄積の丹念なフォローにも支えられている。感情史は人文学に共通の太い幹が活かされるべき場所なのだ。これはひょっとしたら、史料の特性上、中世史においてはこの面が強く押し出されるのではないかとも思われ、中世史の人文学としての可能性に改めて思い至った。

後期は各自の自由研究を発表してもらった。その期間は幸いにも対面授業ができ、同じ中

世史の仲間のなかなか厳し（くも温か）い意見を聴き議論することから貴重な刺激を得てくれたようである。やはり顔を合わせ、場を共有し、身体的に相手の存在を感じてのゼミナールは空気が全く違う。その意味を少しでも実感してもらえたならば嬉しい。

令和2年度 西洋史学特殊講義 担当：教授 小山 哲

本年度は、後期の授業として「近世ポーランド・リトアニア共和国の文化と社会——宗派・階層・コミュニケーションの視点から」というテーマで特殊講義をおこなった。

近世のポーランド・リトアニア共和国は、バルト海南岸から黒海北方のステップ地帯にかけて広がる領域を支配する複合的な国家である。その国土は東西のキリスト教圏の境界線上に位置しており、住民のなかにはキリスト教徒以外の宗教の信徒も含まれていた。16世紀には、宗教改革の波及によって、宗派的な多様性はさらに高まった。宗教的・言語的に多様なこの地域の人びとからなる社会はどのように分節化され、また、それぞれの属性をもつ諸社会集団はどのように共和国内で統合され、共存していたのか。また、彼らのあいだのコミュニケーションは、どのようになされていたのか。こういった問題を、具体的な事例の考察をとおして、講義のなかであらためて考えてみるのが、授業をはじめるまえに念頭においていた課題であった。もうひとつ、担当教員のいささか個人的な事情になってしまうが、昨年度の病気休職中に自分の過去の研究をふり返る時間をいただいて、これまでいろいろな機会に活字になったもの（および、事情があって活字にならなかったもの）を、いまの自分にできる範囲で自己点検しておきたいという気持ちが強くなった、ということもある。

じっさいの授業では、多宗教・多言語国家としてのポーランド・リトアニア共和国の特徴を概観したうえで、次のような問題を取りあげた。

- ①ワルシャワ連盟協約の成立過程とその内容
- ②連盟協約成立後の諸宗派共存体制の変質
- ③宗派化と大学の変容——イエズス会 vs. クラクフ大学
- ④多言語国家の共通語としてのラテン語
- ⑤ヤーシの留学——ポーランド貴族が西欧で学んだこと

このうち、①・②・③は主として宗派的多様性の問題にかかわり、④・⑤は言語的多様性の問題にかかわる。③は部分的に言語の問題（実践的なスキルとしてのラテン語の教育）とも関連し、⑤には宗派的な側面（留学先の選択にさいしての宗派の影響）もあった。コロナ対策で、すべての授業はオンラインで実施し、パワーポイント資料を画面共有で示しながら説明を加えるやり方で進めた。

とりあげた問題は、これまで何らかのかたちで私自身の見解を公表してきたテーマである。授業を準備する過程で、それぞれの問題について、当時の研究環境のなかで自分がどこまで解明できて、なにが課題として残ったままになっているかを、あらためて反省的に考えざるをえなかった。ポーランド内外でその後に新たな研究の展開がみられる場合には、その

内容を付加することも試みたが、時間切れで十分に果たせなかったところもある。なによりも、シラバスで予告していた具体的なテーマのいくつか（社会成層観、メディアの状況）にまったく触れることができなかった点は、受講生みなさんにお詫びしなければならない。

令和2年度 西洋史学演習 III（西洋近世史演習）担当：教授 小山 哲

本年度の近世史演習では、Carlos M. N. Eire, *Reformations. The Early Modern World, 1450-1650*, Yale University Press, New Haven and London, 2016 をテキストとしてとりあげた。ルターの宗教改革 500 周年に合わせて執筆・出版された本だが、内容的には、タイトルが示すように、「宗教改革」を複数形でとらえる視角から、カトリック・プロテスタント双方の改革の動向を巨視的に俯瞰する意図をもって書かれている。プロテスタント側の改革には 7 章、カトリック側の改革には 6 章が充てられており、ほぼバランスがとれていると言ってよいであろう。時代的には、著者の叙述はラテン・キリスト教圏で 15 世紀後半の変革の兆しからはじまり、三十年戦争後の 1650 年前後にまで及んでいる。空間的には、ヨーロッパだけでなく、海外布教の問題に 2 章を割いているので、日本を含む「両インド」が記述の範囲に含まれる（ただし、東方諸教会の動向はほとんど視野に入っていない）。このように「複数形の宗教改革」、「長期の宗教改革」、「グローバルヒストリーのなかの宗教改革」という枠組みが設定されることによって、1517 年の出来事自体はより大きな文脈のなかに位置づけられ、宗教改革史の絶対的基点としての意味づけは相対化されることになる。

とはいえ、ルターの生涯と改革の経緯には 3 章分が充てられており、スイス宗教改革（ツヴィングリ）、宗教改革急進派（再洗礼派、ミュンツァー）、カルヴァンの改革に割かれた叙述の量（それぞれ 1 章分）と比べると、本全体のなかで重点がおかれていることは否定できない。演習中の討論のなかでも、「複数形の宗教改革」論を採用することでルターの改革の評価はどのように変わるのか（やはり変わらないのか）、また、宗教改革を政治・社会・経済・文化の領域にまたがる構造の転換としてとらえる場合に改革者個人の役割をどのように考えたらよいのか、といった点が議論になった。

著者はイエール大学の教授であり、専門家だけでなくアメリカの大学で学ぶ学生や一般読者も念頭において本書を執筆したようである。キリスト教会の教義や制度についてかなり基礎的な説明にも紙数を割いており、日本で西洋史を学ぶ学部生にとっては親切な記述かもしれないと思ったが、多文化主義的な今日の合衆国では、いまやここから説明しないと宗教改革史は叙述できないのか、という思いも抱いた。900 ページ近い大著なので、本年度の演習の授業だけで全体を読みとおすことはできなかった。次年度の近世史演習ではまた別の本をとりあげることが予定しているが、読み残した章を続けて読んでいく時間を設けてもよいかもしれない。

後期の授業では、Eire を読むことと並行して、受講生の研究発表をもとに議論する機会も設定した。とりあげられた地域はヨーロッパの東西にまたがり、テーマも、フランス王権と

高等法院の関係、フランスにおける宗教改革とユマニストのかかわり、中世後期の教会合同運動、ハプスブルク君主のボヘミア統治の理念と実態、近世・近代におけるギリシア民族意識の形成など多様であった。演習での議論が、受講生各自の課題の自覚と今後の研究方向の明確化につながっていくことを願っている。

令和2年度 西洋史学講義 担当：教授 金澤 周作

2 回生以上配当のこの講義は、専任教員が持ち回りで担当している。史学史や歴史学の方法論について初学者に導入を図ることが、主な目的で設けられている。私は3 度目の担当となったが、いつもどおり、「歴史叙述の歴史」を掲げ、ヘロドトス以来の西洋における歴史叙述の展開を前期で 19 世紀まで講じた。後期では、まず 20 世紀歴史学の流れをアナル学派第 1～第 4 世代の主要な成果に即して解説した後、各論として 17 世紀危機論、「西洋の台頭」論（世界システム論を含む）、感情史、言語論的転回を紹介し、それぞれの議論が持つ論争性に注意を促した。

この講義では、近代歴史学の画期性（よかれあしかれ——近代史演習の解説を参照）を強調しつつも、それ以前の、またその周辺のさまざまな歴史叙述群の固有の価値に目を向けさせ、進歩主義的にとらえることのできない、歴史の書き方の多様性を理解してもらおうとした。西洋で蓄積された歴史叙述群は、過去を考える仕方の宝庫である。

60～70 人くらいの受講生のうち、西洋史学専修に進む人は少数派である。もっと興味を持ってくれたらとやや残念に思いはする。それでも、本講義を履修した西洋史学を専攻しない大多数の学生たちにとって、これが西洋史の歴史叙述に触れる最後の機会になるかもしれない、しかし、もしかしたら西洋史のすぐれた著作を手にとってくれる機会になるかもしれない、と考え、なるべく面白い（と私が思う）箇所の引用を多くしようとつとめた。古代から現在に至る、無数の人たちが真摯に紡いだ歴史叙述の魅力が、一人でも多くの人に伝わればと思っている。

1 年を通じてオンライン授業であったが、資料提示に関していえば、これまでの対面型講義よりも自由度が高かった。この種の技術について多少心理的ハードルが下がったので、対面でも活かせればと考えている。

令和2年度 西洋史学演習 IV（西洋近代史演習）担当：教授 金澤 周作

前期のテキストとして取り上げたのは、Stefan Berger and Eric Storm (eds.), *Writing the History of Nationalism* (Bloomsbury Academic, 2019)である。編者の一人ステファン・バーガーについては、2012 年度の演習で精読した大著 Stefan Berger & Chris Lorenz (eds.), *The Contested Nation: Ethnicity, Class, Religion and Gender in National Histories* (Palgrave Macmillan, 2008)を通じて、また、2016 年 4 月に韓国で行われた、同書を含む *Writing the Nation* シリーズ（2008-

2015 年、全 9 冊) の合同書評会での発言などを通じて、ひじょうにすぐれた研究者であり組織者であるとの印象を持ってきた。ナショナル・ヒストリーを紋切型のイメージに矮小化せず、ヨーロッパ諸地域の歴史に根差した具体的なバリエーションをすくい取りながら、他方で、いくつかの共通の要素やベクトルを浮かび上がらせるその力量は並大抵ではない。こうした研究蓄積に立脚し、本論集では、国民の歴史（ナショナル・ヒストリー）ではなく、ナショナリズムの歴史の叙述のされ方、つまり方法論の数々を、明快に紹介する内容となっている。

西洋史研究の分野においては、ナショナル・ヒストリー批判はされて久しく、グローバルあるいはトランスナショナルな観点や、接続や、絡み合い、境界域への注目など、さまざまなアプローチが提案され、実践されている。とはいえ、こと近代史において、事実として「ナショナル」な相は無視できない。さらに、まさに近代西欧において、歴史学は、ネーション単位の大学の学科や学術誌や史料館などの形で制度的に確立した。多くの研究者は今もお、日本でも、この制度に依存して歴史を書いているし、そのことを社会的に承認されている。歴史学が構造的に歴史叙述上のナショナリズムを再生産している状況を指して、バーガーは *historiographical nationalism* と呼ぶ。こうした構造的拘束性を自覚し、歴史叙述を柔軟に発展させるためにも、ナショナリズムに関する諸理論への理解は必須であろう。

マルクス主義、近代主義、原初主義、認知論・精神分析学、構築主義、ポスト構造主義、ポストコロニアリズム、ジェンダー、空間論的転回、グローバル的転回という多岐にわたる視角の長所と短所を議論することで、受講生はそれぞれに大いに刺激を受けたことと思われる。

前期にひきつづき後期もほとんどオンライン授業を余儀なくされたが、例年通り自由発表を行った。3 回生から大学院生、さらには修了したベテランの研究者までが、それぞれの研究成果を報告し、闊達に議論できたのは、コロナ禍にあって、一服の清涼剤のようであった。